

◆選択としての歴史記述

ちょっと心配になったので念のために書いておきたい。

歴史（ヒストリー）は、一種の物語（ストーリー）だといわれることがある。どこかでフィクションのような面を持つものだという主張である。そしてさらに、歴史が所詮物語なのだとすれば、客観的な事実などありようがなく、我々がそれをどう認識するかによって過去の見え方は変わってくる、という主張もあった。社会学の言葉でいえば、社会構築主義をラディカルに突き詰めた議論である。

さらにそこから、唯一不変の過去など実在せず、それをどうみるかということ、すなわち数多くの歴史観の闘争だけに注力すればよいという、歴史の「相対主義」も主張された。

歴史認識をめぐるのは、ちょうどそれをなぞるような現代社会の状況があり、このあたり、「体感する歴史」にとって重要なことなので、ちょっと基本的なところから確認しておこうというわけである。

大切なのは、「歴史は物語」といわれるときの含意だ。そこで以下では、「物語である」ということと、「事実である」ということが矛盾しないことを示しておきたい。

何よりも、私たちが全知全能ではないということは、歴史を調べる上での出発点である。

忘れやすいし、かといって、覚えられていたことが全て重要なことと最初から決まっていたわけでもない。（忘れることの重要性は別の回でも触れたし、これまた別の回で述べたいが、あまりに重要すぎて記録されないことというものもある）

歴史として語られる事実には、常に、「現時点で明らかにされていることとして」とか「現在尤も有力な説によれば」という一文が隠れているのである。例えば、「（現時点で明らかにされていることとして）1600年、関ヶ原の戦いが起こった」「（現時点で明らかにされていることとして）源頼朝は1192年、鎌倉幕府を開いた」「（現時点で明らかにされていることとして）聖徳太子は、十七条憲法を作った」などなど……。

ちなみに、後ろ二つの文は「現時点で」すでに間違っているか、大いに疑われていることである。前者に関しては「鎌倉幕府を開く」とはどういうことを指すのかが簡単に決められなくなってきたということだし、後者の「聖徳太子」に関しては実在を疑う説にも妥当性がある。このように、歴史教科書ですら大きく書き換わっていくことがある。

それは歴史観の変化、相対主義などによるものではなく、歴史学的実証作業の進捗によって起こるわけである。歴史学も科学なので、反証を待つ。後続の研究によって否定され、乗り越えられるものなのである。歴史学の明らかにしたことは暫定的なものであり、「現時点で」最も尤もらしいものが採用されているのに過ぎない。描かれる歴史は不断の「修正」にさらされているが、それは「相対主義」というのとは少し違う。

それを確認したうえで、その「物語」性との関係に話を戻せば、「歴史が物語である」といったときに重要なのは「事実か事実でないか」や「歴史観の相剋」ということではなく、諸事実をめぐるトータルな「理解」であり、そのための「選択」ということである。

以下でそれをちょっと示してみよう。一つの思考実験である。

たとえば過去に関する以下のような記述を考えてほしい。ここで記述は、すべて「事実」に基づくものと仮定されている。

- (1) A君は猫を車でひき殺した。
- (2) A君は子猫を車でひき殺した。

(1) と (2) を比較する。感じ方は人それぞれだろうが、「子」という一文字を加えたことで、若干印象が違うはずである。もちろん「子猫」も「猫」の一種なので、(1) と (2) の違いは、殺された「猫」についての情報提供の量の差であって、(1) が事実で (2) が事実でないということはない。両者は対立しない。さらに次の文はどうだろう。

- (3) 猫好きのA君は子猫を車でひき殺してしまった。

「猫好きの」という4文字を新しい情報（「事実」）として付け加えたことで、文章の印象がまた少し変わったことが分かる。例えば、「よりによって、あの猫好きのA君が。」という感想があるだろう。「(1) と (3) の文の意味は変わらない」と主張する人は（いるとしても）ごく少数だと思われる。

さらに「事実」（新しい情報の提供）を付け加えよう。この思考実験における記者は、さらなる取材・調査を続け、事件の周辺事実を明らかにしていこうとしているわけである。

- (4) 猫好きのA君は祖母の看病で徹夜した次の日、子猫を車でひき殺してしまった。

「それによる寝不足が原因で」と書かずとも、「徹夜」が事故の「原因」になっている、あるいはそう記者が想定し、読者に説明しようとしていることは分かるだろう。「同情」「悲劇」が事件の本質であるというニュアンスを文章から想像する読者もいるかも知れない。

では次の文に移ろう。さらに字句を加え、逆に「猫好きの」を消す。（文末もちょっと変更した）

- (5) ~~猫好きの~~A君は祖母の看病で徹夜した次の日、祖母が可愛がっていた近所の子猫を車でひき殺した。

「猫好きの」という情報が削られてしまったことで、話が急にサスペンスになった。「祖母の飼っていた猫」という情報をこの短い文中に入れれば、A君が看病に疲れて猫に復讐したという「読み」も可能になるわけである。

既に書いたように、ここで以上の(1)～(5)の文章で、加わったり削られたりした

ことは、この場合、すべて「事実」であると仮定されている。ひき殺したのが子猫＝小さな猫であること、A君が猫好きであったこと、事故が看病の次の日であったこと、A君が徹夜していたこと、事故に遭った猫を祖母はかわいがっていたこと、この思考実験においてはすべて「事実（たち）」なのである。

けれどもやはり、単に事件の概要をしめしただけの（1）に比べ、（4）や（5）のほうができごとをめぐる文脈や原因に対する推察など、事件への「理解」が膨らんでいることが分かるだろう。

そして（4）と（5）とは随分印象が違う。「A君＝猫好き」という情報は、この子猫の交通事故死事件の理解においてかなり重要な情報であるにもかかわらず、（5）ではそれが削られてしまっている。（5）は復讐劇への誘導がきつい。

さて、言いたいのは次のようなことである。

記者はここで事実反すること、嘘を吐いているわけではない。代わりに、集めた「事実（たち）」に一貫性を持たせようとして、一つの「ストーリー」を構築している。それは、記者が読者にこの事件をどのように伝えたいかということによって決まる。人間不信を煽り、スキャンダルを書きたい記者は「A君＝猫好き」という事実を削り、（5）のように書くかも知れない。記者の「人間観」「社会観」による「事実」の取捨選択である。

意図的な削除は、記者の「選択」である。ほか取捨選択には、その記者の取材能力不足等の理由、描写に使える文字数、どこまで取材を続けることができたかという外在的な条件もあっただろう。そして、そもそも選択するかしないかというところまで浮かび上がってこない「事実」もあるはずである。

それでも基本的なこととしてここで書いておきたかったのは、歴史とは「事実の確定」ではなく、それをいかに理解するか／させようとするか、という水準と複雑に絡み合うという意味で「物語」だということである。

求められるのは、周辺の多彩な事実をにらみながら、いかに事件への深い理解を可能にさせるのか、ということである。そこでいわゆる「厚い記述」が目指される。恣意的に事実の選択を行えば、特定のストーリーへの誘導が行われる。

もちろん多くの歴史記述において、安易な印象操作は避けられている。それでも、歴史が人々に「理解」を求める限り、それが物語でなかったことはない。それは歴史学が「文学部」にあり、「法学部」にはない理由にもかかわっている。